

開催地名	愛知県南知多町
開催日時	令和 5 年 10 月 22 日（日） 10：00 ～ 12：00
開催場所	南知多町内海防災センター
語り部	大内 幸子 （宮城県仙台市）
参加者	区及び自主防災会、小中学校などの代表者、町内の県立高校生 60 名
開催経緯	当町は南海トラフ地震津波避難対策特別強化地域として指定され、被害予測では町民の 1 割以上の死者が予想されるなど甚大な被害が見込まれる地域となっている。当町のような小規模自治体では、大規模災害時に職員の不足が想定され、地域住民が中心となった避難所運営が喫緊の課題であるが、現状避難所運営の体制づくりが途上の段階となっている。被災地における避難所運営の体験談や課題・教訓をご教授いただき、地域住民への啓発及び町の防災対策に活かすために本講演を企画した。
内容	（１）福住町方式と自分 昭和 61 年 8 月 4 日から 5 日にかけて降水量 402mm の大雨による洪水が発生（台風 10 号）。仙台市においては死者 5 名、床上・床下浸水 32.975 戸であった。当時は線状降水帯という言葉はなかったが、線状降水帯が発生していたと思われる。当時は自主防災組織もなく、避難所運営もなかった。これらの数々の災害の経験から、「自分たちの町は自分たちで守る」決意をした。2003 年度に自主防災組織が立ち上げ、最初に着手したのが名簿作りである。1 軒 1 軒家を回り、調査票を回収した。中越地震支援などの活動にも参加した。他に地域の 4 団体とお互いにできる範囲内で支援と交流を行っていた。 （２）東日本大震災発災時の活動と教訓 東日本大震災発災時、福住町にも、七北田川を遡上した津波が家や瓦礫とともに町の近くまで流れてきた。電気・ガス・水道などのライフラインは停止した。500 人収容・備蓄品の高砂小学校に帰宅困難者含む約 2000 人近くの避難者が殺到した。福住集会所では訓練のおかげもあり、すぐに避難所を開設することができた。また近くの高砂小学校の避難所から、乳児を抱えたお母さんを、立ち上がりの早かった福住集会所に連れてきた。高砂小学校の避難所では赤ちゃん用のミルク粉があっても、お湯が用意できなかったためだ。他にも仮設トイレが外に、かつ和式のものしか設置できず、一部の高齢者の方は苦勞され、体調を崩された方もいらっしやった。このことからわかるように、男性目線ではなく、多様性のある避難所の運営が必要だと後に、強く感じた。 東日本大震災では、「災害の規模が大きければ大きいほど公助には限界がある。」ということがわかった。これは救助してくれる自衛隊や、自治体自体も被災してしまっているためだ。それに伴い、「平時の取組と訓練は災害時に力を発揮する。」ということも実感した。福住町は毎年、避難訓練を行っていたからこそ、発災直後大変な状況下、名簿が取り出せなくとも、要支援者の名簿を各担当の役員が記憶していたので、安否確認ができた。

	(3) 震災後の取り組み 「過去の災害を伝えることは人の命を守ることに繋がる」ことも実感したことの一つだ。過去に津波が到達した地域には津波到達の石碑が建てられていたり、神社やお寺の名前など、地域には名称として残っているのに、伝承が途切れてしまったことで危険地域であることを忘れてしまう。人から人へ伝える大切さを実感している。災害に対応する知識ももちろん必要だが、災害リスクを想定する知識がないと未然に防ぐことができない。だからこそ過去の災害を伝えていこうと決め、女性のための防災リーダー養成講座を受講し、仙台市地域防災リーダー（SBL）に認定され、仙台女性防災リーダーネットワークの立ち上げを行った。また、総務省東京消防庁「災害伝承プロジェクト」の語り部として活動をしている。 皆さんに強く伝えたいことは、「知らないといけない。訓練をしていないことはいざという時にできない。」ということだ。福住町では、当初から地域に根付いていた夏祭りを基盤にして、JAF やドローン会社、救助犬 NPO 団体などに協力してもらい、楽しく防災を学ぶ機会を作っている。お祭りを基盤にすると、それに参加する子どもたち、保護者も巻き込んで防災を学ぶ機会を作ることができる。「子どもの参加」をすごく重視しており、学校などでも防災講演や防災教育の手伝いを行っている。今年初めて先生方への防災研修会も実施した。これは今、実際に教鞭をとられている先生方の中には、東日本大震災の時、まだ中学生や高校生などの子どもで、守られる側だった先生方が増えてきており、「今度は自分たちが守る立場になっているから、学びたい。」と言ってくれて実施できたことだ。子どもから保護者（大人）へ伝えていく影響の大きさを考えると、防災の伝承としても「子どもの参加」は重要である。 最後に、防災リーダーになる方たちへ。心折れることもありますが、継続していれば必ず役に立つ。あきらめないで一人一人が身近なところから出来る事から始めていってほしい。  
開催地より	東日本大震災を経験された語り部の方から、被災時の臨場感のある体験談を伝えていただき、震災後の新たな取り組み、水やトイレの必要性、行政のみならず地域一丸となった避難所運営の重要性など講話いただいた。参加者からは大変参考になったと感想を聞いている。今後は、区及び自主防災会など地域住民、学校、行政が連携した実践的な避難所運営訓練を行って、地域防災力の向上を図っていきたい。